

陶芸の窯…1時間で100度ずつ…どうする？

図工の時間に様々な粘土を使って作品を作ってきた子どもたち。そのうち、「作ったものが生活で使えたり、形に残ったりするようなものを作りたい」という願いが子どもたちの中に生まれてきました。そこで、焼き物用粘土で作品を作り、陶芸窯で焼いてみようということになりました。学校に陶芸窯があるということも活動の後押しなり、子どもたちは焼き物作りに興味を示していきました。そんな子どもたちの思いや、夢中で粘土を使った作品作りに取り組む姿を見て、私は4年1組の今年度を中心となる活動を、「陶芸」にしようと考えました。実際に陶芸家が作った器なども子どもたちに示しながら、私の方から、子どもたちに「陶芸の活動はどうか」と提案してみました。子どもたちの第一声は、「おー！やったー！」でした。子どもたちの目の輝き、雰囲気て伝わるワクワク感。「それだったらコップを作りたい」と早速動き出そうとする子どもたちの姿に、私もこの1年間、子どもたちと一緒に陶芸活動に挑んでみたいと感じました。

そうして始まった、わたしたちの初陶芸チャレンジは、いよいよ窯で焼くということまでできました。陶芸において、ひと口に「焼く」といっても大きく分けて2種類の焼き方があるようで、「素焼きと本焼きの2つがある」ということをAさんが調べて報告をしました。Aさんは「素焼きは800度位で、10時間とか焼くみたいだよ」と話すと、子どもたちも「10時間って…そんなに」と驚いている様子でした。そんなわけで、まず素焼きを行うことにしました。長野小学校には陶芸窯があるため、早速長野小学校の窯で焼くために窯の試し炊きをしてみようということになりました。試し炊きをしてみると、長野小学校の窯は、灯油窯と呼ばれるもので、火の吹き出し口が窯の外にあるため、勢いよく噴出される炎に子どもたちは驚いていました。10分間試し炊きをしたところ、10分で1

60度まで温度が上がりました。まずは窯がちゃんと使えることが分かりほっとしたのですが、その一方で大きな問題がでてきました。それは窯の温度が一気に上がりすぎたということです。調べてみると素焼きは1時間で100度ずつ温度を上げていき、700度から800度まで7時間から8時間かけて焼いていくというのが基本であることがわかりました。子どもたちとこの事実を共有すると、「温度が上がりすぎているから、もっとゆっくり温度が上がる方法を考えなきゃ」と話し、どうしたら窯の温度が1時間で100度ずつ上がるかについて考え始めました。その時の子どもたちの話し合いが以下の様子です。

Bさん：灯油の量を調整してみる。

教師：灯油の量は前回のが最少だったんだよね。

Cさん：煙を出すと温度が下がるんじゃない。

子どもたち：えー、下がるの？

Dさん：風を送ったら？

Eさん：火の吹き出し口にカバーをおいて、火を弱める。

Fさん：2時間で120度ならいけるんじゃないかな。火を止めて、つけてって。

Gさん：火をつけて温度が上がってきたら下げて、また上げるを繰り返す。

教師：Gさんの方法ってどう？（私は少なくとも、この方法しかないと思っていました）

Hさん：めんどくさいよ。学校とかに泊まる？

Iさん：火をつけたり消したりするって大変。無理じゃない。



実は私はNさんの言うように火をつけて消してを繰り返し、温度の上がり方を調整していく方法しかないと思っていました。しかし、子どもたちから予想以上に考えが出てきたこと、そして私がそれしかないと思っていた方法も、子どもたちからすると大変でとてもできるものではないという反応でした。特にIさんの「大変」と話した言葉の裏には、Iさんだけが大変というわけではなく、4年1組みんな火の番をする時にずっと火や温度計を見ていなければいけなくなるので、みんなも大変で、本焼きになると素焼き以上に時間がかかり、より大変であるということ。何より、学校生活以外の時間も火を管理することが必要になるため、先生もずっと温度調節しないといけないので、そうやって考えると本当に大変と思っていたからこそその発言でした。私たちが1年間この陶芸の活動を続けていくために、もっとよりよい方法は無いのかという大きな問いがIさんの中にはありました。ただ、私も子どもたちも本当に困ってしまいました。



そんな中、偶然にも私が陶芸体験をしに行った陶芸教室の先生、西村さんという方が私にアドバイスをしてくださいました。西村さんは、「灯油窯の最初の温度調節は難しいので、火を弱めるために火の前に仕切りを置いたりします」と話されました。私は驚きました。Eさんが考えたアイデアと似ていたからです。Eさんの「仕切り」というアイデアは、私自身イメージがわからず、内心「無理だ」と思っていたため、改めて子どもの可能性を感じる出来事であり、子どもの声をどのように聴くかという私の在り方を考えなくなった出来事でもありました。西村さんは、「その他にも方法はあり、窯の扉を開けておくと温度の上がりやがゆっくりとなります」とも話しをしてくださいました。

これは目から鱗でした。まさか窯を開けてよいとは思っておらず、これもDさんの「風を送る」の考えと似ているなと思いました。子どもたちの中にたくさんのヒントがあったのを私は見逃してたなあと思いながら、この出来事の翌日、「窯の扉を開けてやってみたらどうか」と子どもたちに考えをぶつけてみました。子どもたちは、「それならいけるかもしれない」と納得し、早速窯を開けて試し炊きをしました。すると、10分を過ぎても窯の温度は20度を保ったまです。目標は15分で25度。10分を過ぎると、子どもたちから1分ごとカウントダウンの歓声が生まれました。最後の方は、「10、9、8、…」とみんなでカウントの大合唱。15分経った時に目標だった25度になっており、子どもたちからは歓声が上がりました。窯を開けて焼くという方法がとてもよい方法だったとわかりました。「これならいける!」、私も子どもたちも自信をもって素焼きにチャレンジをしていくことにしました。



陶芸家に学ぶ わたしの陶芸チャレンジ



陶芸の活動が進んでいく中で、「もっとひび割れがなく、上手に器を作りたい。でも、どうしたらいいのかな」「釉薬の色が思った色にならない。なんでだろう」「釜の温度が1090度から何時間経っても上がらず、目標の1200度までいかない。これでは作品が完成しない」など、もっと上手に作品を作りたいという思いから生まれてきた子どもたちのたくさんの問い。そして、たくさんの困りごとが子どもたちの中から生まれてきました。そこで、窯の使い方を教えていただいた長野陶芸教室の西村さんに学校にお越しいただき、一緒に作品作りを行うことになりました。



西村さんからは、陶芸に関わる基礎的な話をしていただき、子どもたちからの質問にも答えていただきました。西村さんが自分の家の駐車場から掘った土と、どこにでもある灰からつくったとした陶器や釉薬を見せてくれました。子どもたちは、「釉薬って作れるんだ。粘土も作れるの」と驚いており、今後の活動の広がりの可能性を感じていました。また、窯の温度が上がらなかった理由について西村さんに尋ねると、「おそらく還元の反応が強すぎていたため、温度が上がらなかった」ということを教えていただきました。子どもたちは、「僕たちの窯って還元で焼いていたんだ」と驚くとともに、良かれと思って燃料を最大にしていたことが、かえって酸素が失われる原因となり、還元が強すぎてせいで温度が上がらない原因となっていた

という事実私自身が衝撃を受けました。ただ、やみくもに燃料を最大にし、窯で焼けば良いということではないことがわかり、窯での焼き方一つとっても、その奥深さや難しさを感じることでありました。その後、子どもたちにとっては初めての磁器土での磁器づくりが始まりました。西村さんからは手練りの方法を見せていただきました。均一に作られていく紐状の磁器土や丁寧に磁器土のつなぎ目が見えなくしていく西村さんの手つきを見て、子どもたちは感嘆の声を漏らすとともに、「早くやってみたい。真似してみたい」と、西村さんの姿から技やコツをつかんでいたようでした。また、電動ろくろの使い方も教えてもらった子どももあり、西村さんとの磁器作りはあっという間に時間が過ぎていきました。結果的に、廊下に並べられた子どもたちの作品は、これまでとは見違えるものになりました。

実は、私は西村さんと子どもたちが出会うのは少し早いのではないかと思います、西村さんとの出会いに迷っていた部分もありました。早く出会いすぎると、西村さんのどこに注目し、何をつかめばよいか分からないまま終わってしまうかもしれない。もっともっと子どもたちが試行錯誤をした上で、西村さんと出会った方がより実りのある経験になるのではないかと考えていたからです。しかし、子どもたちは西村さんの作っている姿や話を聞いて、それを絶対の正解として見つめるのではなく、自分で活かせそうなことを取り取り入れようとしていました。また、西村さんの姿に憧れを持ち、そこに近づこうとしながら、うまくいかない自分を見つめ、あきらめず自分なりに追究をしていました。結果的に西村さんとの出会いで、陶芸への奥深さを感じ、子どもたちの中にさらなる探究心や新たな問いが生まれているようでした。「西村さんから教わった菊ねりを次回は行って、もっと良い作品にしたい」とJさん。「釉薬や粘土も自分で作れるってわかったから、世界に1つだけの陶芸作品を作りたい」とKさん。まだまだ私たちの陶芸チャレンジは続いています。

